

# 無上功德文に対する法然の解釈（二）

——『無量寿経积』の場合——

角野玄樹

はじめに

『無量寿経』の無上功德文に対して、法然は、『選択本願念仏集』（以下『選択集』）において、選択讃嘆と表現する。無上功德文の内容は、称名念仏を修すと、大利・無上功德が得られると説くが、これを、积迦の選択であり、积迦の讃嘆であると、法然は解釈する。

しかし、この無上功德の文を、积迦の主語とするには、少し問題がある。というのも、称名念仏をして無上功德が得られる事態は、本来、阿弥陀仏の功德が大きく関係する事柄である。故に、この無上功德文の主語は、阿弥陀仏であるとする主張も成り立つし、八種選択中の他の七種を参照しても、阿弥陀仏主語のほうが有力のように見える。なぜ、無上功德の文を、积迦が主語、つまり、积迦帰属とするのか、これを本稿の主要問題の一つとする。<sup>①</sup>

右記の問題提起は、『選択集』に関する議論である。しかし、この無上功德の文を、积迦帰属とするのは、『選択集』以前の成立とされる、『無量寿経积』（以下『大経积』）の時点で既になされている。更に、『逆修説法』でも、同文を积迦帰属とする。<sup>②</sup>

本稿では、この問題について、特に『大経釈』に絞って考察する。本稿の流れは、まず第一節で、この問題をより詳しく説明する。次に第二節で、『大経釈』における無上功德文の解釈の内容を検討する。この内容検討も、本稿の主題の一つとする。最後に第三節で、その内容検討を踏まえて、もう一つの主題、すなわち、冒頭にあげた問題に対する解答を施す。これらの議論により、同文に対する『大経釈』の解釈の一端を明らかにする。

ちなみに、残りの『逆修説法』『選択集』における冒頭にあげた問題についての考察は、予定している続篇で論じるつもりである。

## 第一節 無上功德文の釈迦帰属の問題

無上功德の文を、釈迦帰属とする問題について、もう少し、輪郭を明らかにしてみる。

選択讚嘆の文である、無上功德の文をあげよう。

(資料1)

仏語<sup>ハツ</sup>彌勒<sup>ニ</sup>、其有<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>聞<sup>ク</sup>彼<sup>ノ</sup>名号<sup>ヲ</sup>、歡喜踊躍<sup>シ</sup>乃至<sup>一</sup>念<sup>、</sup>当<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>、此人<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>大利<sup>ヲ</sup>、則是<sup>レ</sup>具<sup>ニ</sup>足<sup>ス</sup>無上<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>。

この要文の内容は、一念をすれば、大利・無上功德が得られるというものである。この念仏をして大利・無上功德が得られるというのは、既述したように、阿弥陀仏の功德が大きく関係することである。故に、他の七種の選択傾向に従えば、阿弥陀仏帰属の文のほずである。しかし、『選択集』においては、同文は釈迦帰属の文となっている。これを問題としているわけである。

この問題提起に対して、次のような、応答も考えられる。『無量寿経』を説くのは、まさに釈迦なのだから、釈

迦帰属でもよいのでは、というものである。しかし、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』『般舟三昧経』のいずれも、釈迦が説いている經典であるが、それら經典の念仏要文の解釈である、八種選択中の他の七種の選択を見ると、周知のとおり、釈迦のみの帰属とはなっていない。すなわち、

- ① 選択本願 (阿弥陀仏・『無量寿経』)
- ② 選択讃嘆 (釈迦・『無量寿経』)
- ③ 選択留教 (釈迦・『無量寿経』)
- ④ 選択摂取 (阿弥陀仏・『観無量寿経』)
- ⑤ 選択化讚 (阿弥陀仏・『観無量寿経』)
- ⑥ 選択付属 (釈迦・『観無量寿経』)
- ⑦ 選択証誠 (六方諸仏・『阿弥陀経』)
- ⑧ 選択我名 (阿弥陀仏・『般舟三昧経』)

と、八種選択のそれぞれの主語は、釈迦以外にも、阿弥陀仏もあれば、六方諸仏もある。故に、『無量寿経』を説くのは、まさに釈迦なのだから、釈迦帰属でもよい」という応答だけでは、満足できない。

これら選択讃嘆以外の七種の選択の内容を見ると、その念仏要文において、最初に行動する仏が、優先的にその選択の主語となっているようである。例えば、選択本願の場合、第十八願を誓うのは、阿弥陀仏(法蔵菩薩)である。第十八願文は、『無量寿経』に所収する。しかし、『無量寿経』を説く釈迦が、選択本願の主語とはならない。第十八願文の内容で、最初に行動する仏、すなわち、この場合、阿弥陀仏が、その選択の主語となるのである。

このように、八種選択のうち、七種の選択においては、その念仏要文で、最初に行動をおこす仏が、その選択の

主語になるようである。しかし、選択讃嘆のみ、その傾向を無視しているかのようである。

故に、無上功德文の釈迦帰属の理由について、同経を釈迦が説いているからという解答では、解決になっていない。したがって、別の解答が必要になってくる。その解答を、本稿では『大経釈』に絞って、探ることにする。

しかし、今問題の場としている八種選択は、『選択集』のみで説く教説である。故に、この問題は、『選択集』のみでおこっているという疑念もおこるかもしれない。つまり、『選択集』の問題を、『大経釈』を検討して、その問題に対する解答を施すのは筋違いでは、という疑念である。

そこで、この『大経釈』を含む三部経講説では、念仏要文の主語がどうなっているのか、念のため、いくつか例をあげて簡単に確認しておこう。

『大経釈』の本願文では、阿弥陀仏（法蔵菩薩）が主語となっているようである。あるいは、『觀無量寿經』<sup>④</sup>の撰取文でも、やはり、阿弥陀仏帰属のようである（『觀無量寿経釈』<sup>⑤</sup>）。あるいは、『阿弥陀経』の証誠文でも、六方諸仏帰属となっている（『阿弥陀経釈』<sup>⑥</sup>）。このように、三部経は、釈迦が説法したものであるが、釈迦帰属とは限らない。やはり、その念仏要文で、最初に行動をおこす仏が主語となる傾向を有しているといえる。

このように、三部経講説の念仏要文でも、最初に行動をおこす仏が主語となる傾向であるので、やはり、『選択集』と同様に、なぜ、無上功德文では、阿弥陀仏帰属ではなく、釈迦帰属なのか、問題となる。本稿では、『大経釈』における、同問題に対する解答を示すつもりである。しかしその前に、無上功德文に対する『大経釈』解釈文を詳しく検討する必要がある。次節では、『大経釈』の該当文を考察する。

## 第二節 無上功德文に対する『大經釈』の解釈

### 第二節第一項 『大經釈』該当文の概要

無上功德文に対する『大經釈』の解釈文をあげる。

(資料2)

六流通初、其有得聞彼名号、歡喜踊躍、乃至一念、當知為得大利。此人則是具足無上功德者、此文有四意。一來意、二廢助念及諸行、明但念仏、三舉一念、況十念等。四生信心不為誹謗。

一來意者、上正宗正為時會衆生、説念仏往生法也。今流通者非但當時獲大利益、後五百歲亦説念仏往生法、遠沾妙道等。云

二此廢上助念及諸行、明但念仏故者、上本願願成就文雖明但念仏、上來迎願等中及次三輩文明助念往生、諸行往生。依之諸往生者、於但念助念諸行、懷疑網未決。故至流通、初廢助念諸行二門、明但念仏往生。謂其有得聞彼名号。云善導釈云。其有得聞彼弥陀名号、歡喜至一念、皆當得生彼。云此義亦非私意、即善導御意也。此經三輩中説助念及諸行、後流通中、廢之唯明念仏。其次第似觀經。觀經中、先広逗機緣、説十三定善、三福九品之業、明諸行往生。其次仏以此法、付屬給文云。仏告阿難、汝好持是語等。云善導釈云。從仏告阿難汝好持是語已下、正明付屬弥陀名号、流通於遐代。上來雖説定散兩門之益、望仏本願、意在衆生一向專称、弥陀仏名。已上此已如此、今經亦如此。上逗機緣、且雖説助念仏往生及諸行往生之旨、准仏本願故、至于流通初、廢諸行歸但念仏也。助行猶廢之、

況ヤ但ヲ諸行哉。云レ  
云

無上功德文の部分から、『無量寿経』の流通分であると法然は解釈する。その無上功德の文には、四つの意図があるとする。すなわち、第一に来意、第二に廃助念及諸行明但念仏、第三に挙一念況十念等、第四に生信心不為誹謗である。この資料2では、第二の廃助念及諸行明但念仏の範圍までを引用しており、そこまでを中心に検討する。

第一の来意では、流通分である無上功德文を説く意図について説明する。すなわち、正宗分は、釈迦の言葉を直接聞く聴衆のためのものである。しかし、流通分は、釈迦滅後の正法以降の衆生のために、念仏往生の教えを説き、遠い時代まで利益を及ぼすのだとする。

第二の廃助念及諸行明但念仏では、次のような「疑網」をあげる。つまり、正宗分における第十八願・第十九願などや三輩では、念仏往生の他に、諸行往生も説く。そして、本願文・三輩文は、但念仏往生義・助念仏往生義・諸行往生義の三義を含んでいるとする。このように、『無量寿経』が念仏往生の教えを中心的に説くにしても、助念仏往生や諸行往生の道も一応示す。故に、但念仏往生の道に進むべきか、助念仏往生や諸行往生の道に進むべきか、『無量寿経』の読み手は、疑いを懐いてしまうとする。『無量寿経』流通分において、この疑網を解消すべく、無上功德の文を説くのだとする。無上功德の文は、但念仏往生を明らかにし、助念仏往生・諸行往生を廃するとする。すなわち、廃明を示す。

更に、『無量寿経』の無上功德文を含むそこに至るまでの内容は、『観経』流通分の付属文を含むそこに至るまでの内容と、近似しているとする。すなわち、『観経』では、定散二善を説くが、『観経』における釈迦の意図は、第十八願文を参照するに、衆生に一向念仏させることだとする。その証拠文として、『観経』付属の文と、善導『観経疏』の付属の釈文を引用する。この『観経』の内容と、『無量寿経』の内容が似ているとする。つまり、『無量寿

『經』でも、本願文や三輩文では、様々な機根に対応して、助念仏往生・諸行往生を説く。しかし、流通分の無上功德文における釈迦の意図は、第十八願文にしたがうに、衆生に助念仏往生・諸行往生を廃させ、但念仏往生に帰させることである。すなわち、廢歸を説く<sup>8)</sup>。つまり、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生の道に迷う人に対し、無上功德文の釈迦の意図は、但念仏往生の道に進むべきであることを廢歸は示す。これで疑網を解消しようとしていると、法然は解釈するのである。

## 第二節第二項 法然が描く『無量寿經』の話の流れ

次に、資料2の内容における、二つの要素について、第二節の第二項・第三項にわたって、詳しく検討しよう。

第一に、法然が描く『無量寿經』の話の流れである。しかしその前に、疑網の人は、誰かという問題を考える。資料2の来意において、流通分は、釈迦滅後の衆生に対して説くものだとする。そのことを踏まえると、この疑網を懐く人は、釈迦滅後の人であろう。『大経釈』における疑網を懐く人というのは、「諸往生行者」(資料2)とあるように、往生の道に進む人なので、その人は、釈迦滅後の正法以降に『無量寿經』を読む往生行者である。そして、その未来の往生行者の疑網を解消するものが、無上功德文ということである。

この疑網やその疑網を解消するという話題は、法然なりの、『無量寿經』流通分の解釈である。一般的に流通分とは、未来の衆生のために、その經典を広めるための段落である。このことと、法然の『大経釈』における流通分の解釈は、対応しているといえるだろう。

法然は、『無量寿經』を、念仏往生を中心に説くものであるとし、その立場から解釈を展開する。そして、法然は、『大経釈』において、同経を解釈するに、次のような話の流れを描いているといえる。釈迦は、『無量寿經』の

内容を説法するに、本願文や三輩文の部分では、様々な機根に対応するため、但念仏往生の他に、助念仏往生・諸行往生の意を含める。そして、同経の未来の読み手が、三義のうち、どれにしたらよいのかという疑問を懐くことを釈迦は予見し、流通分を説く時に、その疑問を解消するため、廃明・廃帰の意を含む無上功德文を説く。このような同経の話の流れである。つまり、このように法然は『大経釈』において、同経を捉えているのである。

なお、この『無量寿経』の話の流れという要素は、本稿の冒頭で提起した問題を解決するにおいて重要である。詳細は第三節で述べる。

### 第二節第三項 廃明と廃帰の関係

第二に、廃明と廃帰とを順にそれぞれ分析し、両者の関係について考察する。

廃明とは、助念仏往生・諸行往生を廃し、但念仏往生を明かすという意味である。しかし、『無量寿経』の無上功德文においては、往生についての話題は存しないように見える。なぜ、但念仏往生を明かすといえるのか。この問題を含め、この廃明の明ということについて、まず検討してみよう。

無上功德文が、念仏往生文であるとする根拠として、『大経釈』（資料2）で引用する、善導『往生礼讚』の無上功德文の釈文をあげることができる。すなわち同書では、

（資料3）

其有得聞彼 弥陀仏名号 歡喜至一念 皆当得生彼。

とある。資料3の文と、『無量寿経』無上功德文とを対比すると、同経同文の「当知、此人為得大利、則是具足無上功德。」の文の代わりに、「善導釈文では、「皆当得生彼」となっていることがわかる。このことから、法

然は、『無量寿経』の大刹・無上功德を得ることと、善導釈文の往生の内容とが対応していると解釈しているのだろう。つまり、法然の理解においては、大刹・無上功德とは、往生に対する善根と見ているのだろう。念仏を修して、大刹・無上功德という善根を得て、そしてその善根が効いて、命終の時、往生ができるということである。このことから、無上功德の文を、念仏往生の文と解釈するのだろう。

そして、無上功德文では、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生の三義から、但念仏往生のみを選び、明かしているということであろう。このように、本願文・三輩文と無上功德文とが連結される。この連結は、疑網を懐く時点でなされている。しかし、それを別とすれば、これらの文は、いずれも釈迦が往生行を伝えようとしていることと共通するので、これらの文を連結するのは、当然ということでもあるのだろう。

次に、廃明の廃という表現について検討しよう。右記のように、三義の中からの選びという場があるので、但念仏往生のみを明かせば、残りの二義は廃することになる。<sup>10</sup>この廃も同様に、本願文・三輩文と無上功德文とを連結し、選びの場を設け、二義の廃を導き出しているのである。

例えば、無上功德文のみを単独で取り出して、それをいくら眺めても、廃とはいえない。そこには、廃する対象の諸行などがないからである。無上功德文のみでは、諸行の内容が全くない故、これのみでは、諸行については何も記述できない。廃ということさえ、記述できないのである。本願文・三輩文と無上功德文とを連結し、選びの場を設けないと、廃とはいえないのである。選びの場を設けることにより、廃明は成立するのである。

廃明の検討の次は、廃帰である。廃帰とは、これも既述したように、釈迦が衆生に助念仏往生・諸行往生を廃させ、但念仏往生に帰させるという意味である。その根拠として、『観経』の内容と『無量寿経』の内容が近似しているとおさえ、『観経』付属の文や、善導『観経疏』付属の釈文を証拠文としてあげるといふことであつた。

廃帰の成立条件を考えよう。この廃帰は、無上功德の文とうまく対応できていない面もある。すなわち、無上功德の文は、釈迦の使役表現ではない。廃明ならば、本願文・三輩文と無上功德文とを連結して解釈することにより、表現可能である。しかし、廃帰を無上功德の文で成立させるには、廃明よりも工夫が必要である。

すなわち、『大経釈』においては、『無量寿経』の内容と『観経』の内容が近似しているとおさえた上で、『観経』の付属の文・同釈文と、無上功德文とを対応させる。そして、付属の釈文で容易に導ける廃帰を、無上功德文でも廃帰が成立すると解釈するのである。

更に、廃帰成立の条件として、廃明もあげられるだろう。無上功德文による、三義のうち、一義に絞るという事柄（＝廃明）をあげないと、廃帰は導けない。そうしないと、『観経』と対比できないからである。故に、『観経』『観経疏』の文とともに、廃明もないと、廃帰は導けないのである。

また、廃帰にも、廃明と同様、選びの場が必要である。選びの場がないと、少なくとも、廃とはいえない。なぜなら、無上功德の文は、念仏のみ説き、諸行には言及していないからである。諸行に対応するものがなければ、やはり、廃とはいえない。故に、本願文・三輩文と無上功德文とを連結することにより、選びの場を設け、廃帰を導くことができるのである。以上が、廃帰の成立条件である。

では、廃明と廃帰の関係はどうであるのか。以下に考察する。

この廃帰は、無上功德文を本体として、廃明と表裏の関係にあると筆者は考える。つまり、無上功德文における釈迦の行動を、廃明と廃帰の二つの側面から表現していると推測する。釈迦が説く称名念仏を修せば、往生できるという無上功德文の内容を、釈迦がいかに三義を位置づけるかという表現の場合、廃明であり、釈迦が三義の中で衆生に何をさせたいかという表現の場合、廃帰であるということである。このように、廃明と廃帰の関係は、同じ

無上功德文の釈迦の行動を、別々に表現したものである。つまり、無上功德文における釈迦の行動の際、釈迦のその意図・行為を別々の角度から示したものが、廃明・廃婦という二つの表現なのである。

このように、廃明と廃婦について明らかにした。しかし、次のような疑問もおこりうる。疑網に対処するならば、廃明と廃婦と二つも出さなくてもよいのではないだろうか。例えば、廃明だけにして、廃婦をわざわざ上記のような工夫をしてまで出さなくてもよいのでは、というものである。この問いについては、以下のように考える。

疑網とは、「諸<sup>レ</sup>往生<sup>レ</sup>行者」(資料2)とあるように、往生を目指す行者が懐くものである。そして、三義のうち、どの道に進むのがよいか、迷ってしまう、という内容である。つまり、この疑網の話題の次元は、往生行者がどの道に進むのがよいかという次元であり、往生行者が主語の次元なのである。

この点をおさえて、廃明を見てみると、廃明は、釈迦が助念仏往生・諸行往生を廃し、但念仏往生を明らかにするとのことである。つまり、釈迦が主語の次元なのである。この廃明の次元だと、先の疑網の次元とは異なる。すなわち、疑網では、往生行者が、三義のうちどの道を進めばよいのかという次元であるが、廃明はその次元と異なっており、単に、釈迦が、三義をどのように位置づけているのかを述べたにすぎないのである。つまり、疑網という問いと、廃明という答えは、厳密にはかみあっていないのである。

それに対し、廃婦の次元は、疑網と同じ次元といえる。すなわち、廃婦とは、釈迦が衆生に助念仏往生・諸行往生を廃させ、但念仏往生に帰させるということである。この廃婦の場合は、往生行者が、実質、廃したり帰したりするので、往生行者が主語である次元に変換されているのである。つまり、疑網という問いと、廃婦という答えは、かみあっているのである。

このように、疑網に対し、廃明だけでは不十分と、法然は考えたのであろう。廃明では、疑網という問いに、厳

密には対応してないので、対応する廃帰を出したのであろう。<sup>(12)</sup>

しかし、それならば、疑網に対しては、廃帰のみ出し、廃明は出さなくてもよいのでは、という疑問もおこるかもしれない。その疑問に対しては、既述した内容を参照すればよい。

すなわち、廃帰の成立条件の一つに、廃明も必要なのである。先に示したように、廃明がないと、廃帰は導けない。故に、廃帰だけ表記すればよいのではなく、廃明も表記する必要がある。したがって、廃明と廃帰と、両方も表現しなければならぬのである。このように、廃帰を導くために、廃明は必要であり、疑網の次元と対応するために、廃帰も必要なのである。両者とも、不可欠なのである。

### 第三節 無上功德文を釈迦帰属とする理由

第二節においては、無上功德文を『大経釈』でいかに解釈しているかを検討した。それを踏まえて、本節では、なぜ、無上功德の文において、釈迦が主語なのか、解答を施す。

『大経釈』における無上功德文の解釈は、未来の衆生が懐く疑網に対応するためのものである。この未来の衆生の疑網とは、『無量寿経』を読む人が懐く疑網である。疑網を懐くことを、釈迦が予見して、その疑網を解消するため、無上功德の文を説いたということであった。

このことをおさえるならば、冒頭にあげた問題も自ずと解消する。すなわち、『無量寿経』の本願文や三輩文に疑網を懐くことを予見するのは釈迦である。そして、その疑網に対応する仏は、同じく釈迦であるのが自然である。故に、その疑網を解消する内容である無上功德の文は、釈迦帰属の文となるのが自然である。もし、阿弥陀仏

が無上功德文の主語なら、『無量寿経』の釈迦説法の中でおこる問題を、なぜ、釈迦を越えてまで阿弥陀仏がするのかということになってしまう。

『無量寿経』の未来の衆生の読み手が、本願文や三輩文を見て、但念仏往生などの三義のうち、どれにするのか迷ってしまうという疑網を懐く。それに対して、無上功德文が存すると『大経釈』では解釈する。このような次元に降り立った場合、無上功德の文は、釈迦帰属となるのが自然なのである。もし、この次元において、無上功德文を阿弥陀仏帰属とすると、複雑な構造となってしまう。そのようなことは不可能ではないかもしれないが、無理矢理な感否めないだろう。故に、『大経釈』において、無上功德の文を釈迦帰属とするのである。

また、次のような考え方も可能だろう。『大経釈』において、無上功德の文は、流通分という性質と不可離である。無上功德文が同書で解釈される時、流通分ということが常に前提にある。流通分とは、一般的に、その経典の教説を、釈迦が未来の衆生に広めるための段落である。無論、『無量寿経』も同様といえる。そして、『大経釈』においては、無上功德文は、流通分という性質と不可離であるため、同文が、釈迦帰属となるのである。なぜなら、流通分とは、釈迦が主語となって、未来の衆生のために教説を広める段落であるからである。このようなことも、同文を釈迦帰属とする理由となるだろう。

### おわりに

問題提起として、八種選択のうち、他の選択とは異なり、選択讚嘆のみ、その念仏要文の最初の主語ではないということであった。なぜ、無上功德の文は、釈迦帰属であるのかということである。しかし、この無上功德文を、

釈迦帰属とするのは、『選択集』より前に成立した、『大経釈』や『逆修説法』でも同様である。『逆修説法』『選択集』に関する同問題の検討は、続篇にまわすことにし、今回は、『大経釈』に絞って議論した。

本稿では、『大経釈』における同問題の解答を施す前に、『大経釈』の該当文を検討することにした。『大経釈』の該当文の検討では、主に二つのことを論じた。

第一に、法然の描いた『無量寿経』の話の流れである。未来の衆生が、同経の本願文や三輩文などを読み、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生のうち、どの道に進めばよいのか、疑網を懐いてしまう。その疑網に対応したものが、流通分の無上功德文である。『大経釈』において、このような話の流れを同経の内容から描いているのである。

第二に、廃明と廃帰の関係である。廃明と廃帰とは、無上功德文を本体とする、表裏の関係である。すなわち、無上功德文の釈迦の行動を、別々の表現でなしたものが、廃明と廃帰である。そして、廃明・廃帰は、補完関係にあり、両者ともに、必要なことも指摘した。すなわち、廃帰成立のため、廃明は必要であり、疑網に厳密に対応するため、廃帰が必要なのである。<sup>13)</sup>

そして、冒頭の問題提起に対しては、以下のような解答である。『大経釈』において描く同経の話の流れの次元では、釈迦が主役である。従って、その次元の中で、疑網に対応する仏は、阿弥陀仏よりも、釈迦であることが自然であろう。つまり、この同経の話の流れの意味を含む無上功德文が、釈迦帰属となるのは、ごく自然な帰結なのである。

これらの考察の結果、『大経釈』該当文における、釈迦帰属の問題・疑網・廃明・廃帰等々の各要素の関係を示しえた。同書該当文の一端を説明しえたであろう。

参考文献

- 岸一英『寛永・承応・正徳 三版対照無量寿経釈』（浄土宗宗典研究室、昭和五十九年三月）
- 岸一英『大経直談要註記』所収『無量寿経釈』二版対照（私家版、平成三年一月）
- 岸一英『三部経釈』の研究（一）（『法然上人研究』創刊号、平成四年四月）
- 岸一英『無量寿経釈』古層の復元——『三部経釈』の研究（二）——（『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』、山喜房仏書林、平成十六年四月）
- 岸一英『阿弥陀経釈』古層復元本（『仏教文化研究』五四、平成二十二年三月）
- 浄土宗総合研究所『現代語訳 浄土三部経』（浄土宗、平成二十三年四月）
- 善裕昭『法然上人における重要用語の検討——廃立——』（『仏教論叢』三五、平成三年九月）
- 本庄良文『選択集』における「廃立」の意味——服部英淳訳の顕彰——（平成十六年九月浄土宗総合学術大会口頭発表）
- 本庄良文『選択集』における「廃立」の意味——服部英淳訳・英訳の顕彰——（平成十六年九月浄土宗総合学術大会口頭発表）
- 本庄良文『選択集』における「廃立」の意味——服部英淳訳の顕彰——（『浄土宗学研究』三一、平成十八年三月）
- 本庄良文『選択集』第四・第十二章における「廃立」の語義（『八百年遠忌記念 法然上人研究論文集』、平成二十三年一月）

註

- (1) なお、この問題提起や、それに対する解答をテーマとする先行研究は、管見の及ぶところ、発見できなかった。
- (2) 石井教道氏は、『昭法全』において、この三書の成立順を、①三部経講説、②『逆修説法』、③『選択集』とされる

ようである。

(3) 『浄全』第一卷三五頁。なお、句読点は筆者が付した。

(4) 『昭法全』七一〜七三頁。

(5) 『昭法全』一二〇〜一二二頁。

(6) 『昭法全』一五二頁。岸一英「阿弥陀経釈 古層復元本」(『仏教文化研究』五四、平成二十二年三月)六頁。

(7) 『昭法全』九一頁。なお、読みやすさを考え、資料2の文の改行は筆者がした。また、資料2の六行目「故<sub>ニ</sub>至<sub>テ</sub>流通<sub>ス</sub>」の訓点は、「故<sub>ニ</sub>至<sub>テ</sub>流通<sub>ス</sub>初<sub>ハ</sub>」が正しいであろう。

(8) 『大経釈』の廃帰の文の訓は、使役表現になつていないが、使役表現だと思われる。というのも、この文の主語は文脈上、釈迦であろう。すなわち、釈迦が主語で、述語が「帰」であるが、「釈迦が念仏に帰する」というのは、おかしな内容になってしまう。また、典拠となる付属の釈文において、使役表現となっている。これらのことから、廃帰は、釈迦が衆生に……させるという、使役表現だと考える。

廃帰は、『選択集』第四章・第十二章にも説かれる。その『選択集』の廃帰を、釈迦の使役表現にすべきことは、本庄良文「『選択集』における「廃立」の意味——服部英淳訳・英訳の顕彰——」(平成十六年九月浄土宗総合学術大会口頭発表表、同『選択集』における「廃立」の意味——服部英淳訳の顕彰——)、『浄土宗学研究』三一、平成十八年三月)、同『選択集』第四・第十二章における「廃立」の語義」(『八百年遠忌記念 法然上人研究論文集』、平成二十三年一月)などにおいて主張されている。本稿では、その本庄論文を大いに参照し、『大経釈』の廃帰も使役表現であると解釈した。

なお、かつて筆者は、拙稿「法然における「傍」の語義についての一考察——特に『選択集』第四章の傍正義に関

して——」（『仏教文化研究』五四、平成二十二年三月）において、本庄説の廃帰を使役表現とするのは賛成だが、廃立も使役であるという同氏の説については、筆者は反対をし、その論拠を簡潔に記した。それに対し、本庄氏は、前掲論文の『選択集』第四・第十二章における「廃立」の語義において、筆者の見解を批判された。拙稿の私見に対する批判を、まずは本庄氏に感謝したい。この本庄氏の批判に対する筆者の応答については、別の機会にまわりたい。

(9) 『浄全』第四卷三六二頁上。

(10) ただし、この場合の廃というのは、助念仏往生・諸行往生を明らかにすることについての否定である。すなわち、明らかにすることをやめるということである。

(11) 付属の釈文では、「一向に専ら弥陀の名を称させる」という内容から、使役表現の「帰」を導く。また、「定散両門の益を説くといえども」と先の「一向に専ら弥陀の名を称させる」という内容から、衆生が一向念仏すること、諸行をやめることになるので、それを使役表現したものが「廃させる」である。すなわち、使役表現の「廃」を導く。

(12) ただし、廃明だけでも、肯定的に受け止めれば、疑網に答えうる。釈迦が、但念仏往生のみを明らかにしているので、それを肯定的に行間を読めば、この念仏行者は、疑網を解消し、但念仏往生の道に進むことができる。しかし、批判的に受け止めた場合、厳密には廃明は、問いかみあっていないため、廃帰が必要となる。他宗などからの批判を想定した場合、このような批判的な受け止めも、当然、法然は留意しなければならない。

(13) 廃明・廃帰の法然の説示は、無上功德文が、疑網に対応する文であることの論証である。つまり、廃明・廃帰をかくのごとく意味づけることの中に、同文が疑網に対応する文であることを含んでいるのである。すなわち、廃明・廃

帰を解釈する中で、疑網をあげ、同じ往生行文の本願文・三輩文と無上功德文とを連結する。本願文・三輩文と連結した廃帰は、助念仏往生・諸行往生を廃させ、但念仏往生に帰させるとする。この時点で、無上功德文が、疑網に対応しているのである。また、廃明も、肯定的に受け止めれば、やはり同様に、疑網に対応しうる。廃明・廃帰をかくのごとく意味づけることは、法然の描く『無量寿経』の話の流れの成立に貢献しているのである。

なお、本稿の議論の構造から見れば、廃明・廃帰の解明は、『無量寿経』の話の流れを証拠立てるものでもある。故に、廃明・廃帰の解明は、本稿にとって必要な議論ともいえる。本稿では、この証拠立てにより、『無量寿経』の話の流れという要素を確保し、その確保した要素を、冒頭の問題提起に答えるための鍵としていともいえる。

〔付記〕 本稿は、平成二十三年度浄土宗総合学術大会の口頭発表の原稿を大幅に改稿し、一部修正したものである。

（平成二十三年辛卯十二月十五日原稿執筆了）

（平成二十四年壬辰二月十日第一校了）

（平成二十四年壬辰二月二十七日第二校了）